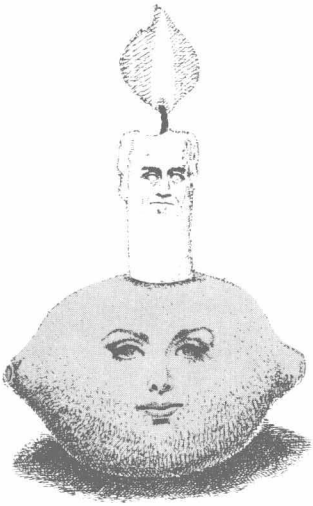
お天気師野郎たち

藤本義一

毎日新聞社

お天気師野郎たち



毎日新聞社

お天気師野郎たち

昭和五十二年六月二十日　印刷
昭和五十二年六月三十日　発行

著者　藤本義一
編集人　桑原隆次郎
発行人　伊奈一男
発行所　毎日新聞社
〒100　東京都千代田区一ツ橋
〒530　大阪市北区堂島上
〒802　北九州市小倉北区紺屋町
〒460　名古屋市中村区堀内町

印刷　東京ベル印刷
製本　佐久間製本

お天気師野郎たち　目次

色即是実……九
チョイかけ入門……一四
童貞屋……二〇
未亡人たち……二五
臍臍時計……三三
同棲一緒……三七
投資効率……四三
ベッドのあとさき……四八
婚姻届……五四
風と共に来た……五九
女の次は女……六五
白サギへの道……七二
発汗と儀式……七六
入籍完了……八二
万引女……八八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おかしな成行き……九三
恋の運動会……九九
二人目の女……一〇四
狂言開幕……一一〇
金こまし……一一五
女のツボ……一二一
成功は失敗の因……一二七
女ヤク一名……一三二
三十五歳の女……一三八
クロサギ……一四四
サギの憲法……一四九
女狐……一五五
自殺準備完了……一六〇
偽心中行……一六六
あの世……一七一

珍子の視線……一七七
恋はヌリ絵……一八三
ケベック心電図……一八九
〇・七カロリー……一九四
涙、また涙……二〇〇
ホンスイ……二〇六
男の参稼報酬……二一一
三重食い……二一七
二枚舌より二枚腰……二二二
スケダチ屋……二二八
怕い女……二三三
天井裏……二三九
クソリアリズム……二四四
詐欺学問……二五〇
うつらうつら……二五五

ダブルゲーム……二六一
舌先ゲーム……二六七
晶子の場合……二七三
男女の損益分岐点……二七八
節子の場合……二八四
丸顔の聖徳太子……二八九
嫉妬のやり場……二九五
レディ・トースケ……三〇〇
梯子女（スケ）……三〇六
悪い予感……三一一
巷の雨……三一七
ロンリー・イン・ラブ……三二三
女の敵は女……三二八
女体は偉大なり……三三四
苦い出発……三三九

演技の論理……三四五
狐狸集結……三五〇
お見事です……三五六
ハネムーン……三六二
おかしな夫婦……三六七

装幀　安彦勝博

お天気師野郎たち

『サンデー毎日』（昭和五十年六月八日号～五十一年八月二十九日号）連載

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

色即是実

一

「人間ちゅうもんはねえ、あんた、一言でいうたら、どんなもんやと思いなはる……」

佐倉と名乗る男は、人なつっこい眼差で曾野昭太郎を見た。

「さあ、ねえ……」

「なんといわはるか、これは楽しみですなあ、ほんまのとこ……」

佐倉は、右脚に貧乏ゆすりをしながら、本心から楽しそうにいう。彼は奇妙な面構えをした男だ。曾野は、あれこれと類似の動物を思い泛かべていた。

そうだ。駝鳥に似ているのだ。

滑稽で、飄々乎としているが、よく見ると獰猛な感じがする。顔全体が小さいが、目は丸くて、大きい。そして目蓋は上下に二重から三重になっている。目だけ見ていると、日本猿の目にも思える。頭は五分刈という感じだが、柔らかなほよんほよんとした髪の性質なので、やくざ映画の登場人物のように粋ではない。

「人間ちゅうのんはでんな。よろしいか、欲に手足が生えた動物ですのや。そら、人間と動物の違いというたら、ほかにもおまっしゃろ。動物は胃下垂にならんかて人間はなるとか、人間は痔になるけれど、動物はならんとか、ね。そう、数えたら際限ないかわからんわけですわ。そやけどもでんな、もうちょっとですな、人間がなんで欲に手足の生えた動物かということを具体的にいわせてもろうたらですな、人間は金で物を売買しますわな。貨幣経済というものを用いよる。もうひとつはでんな、四季を問わずに、男と女が抱き合いよる。こういう動物は他にいてまへんもんやで、あんさん、曾野昭太郎はん……」

一度いっただけなのに、佐倉は曾野のフルネームを知っているのだった。

だが、面白い明解な論理だと思う。人間は考える葦だといったパスカルの言葉も消えてしまいそうだ。考えるのは、他の動物も同じことだ。人間よりも感覚が発達していて、予知能力にも優れている動物がいくらでもいる。人間は無能だから考える葦になったのかもわからないと思う。とにかく、佐倉という男と面と向かっていると、暗示にかけられたように、今までの考えが崩れてしまう奇妙さがある。

佐倉は、旨そうに煙草を喫っている。目を細め、煙の行方を追うという悠揚たる喫い方である。農夫が野良仕事の一段落で一服喫けているという感じだ。そう思うと、彼の背の雲形定規模様ともいえる色彩の向こうにひろがっている真昼の歩道橋が、のどかな畦道に見えてくる。

とにかく奇妙な雰囲気をもった男である。

喧騒が苛立ちを生む都会にあって超然としている。小柄な

のに、不思議に貫禄が具わっているのである。
つい、三十分ほど前に、曾野は梅田の映画館で佐倉と知り合ったのだ。上映されていたのは、邦画洋画とりまぜてのポルノ映画であった。乳房ばかりが矢鱈画面に揺れるもので、恥部はぼやけてより淫猥になり、くるっと臀部が向くと画面が自棄に鮮明になり、腰元役のポルノ女優の腰にくっきりとパンティのゴムの痕跡が見える代物であった。洋画に登場した女優は、ホルスタイン並みの乳房を画面一杯に押しつけ、自分の乳首を吸ってみせたりした。
半ば興醒めしていた曾野の耳に、
「ふーん、えらいとこまでやるようになったなあ……日本も……」
という声が、暗闇の中から三度にわたって聞こえてきたのだった。
日本も……といういい方が、おかしかった。ロばしっている本人の声はさほど興奮しているわけではない。嘆いているわけでもない。自身に語りかけているようだった。
曾野は、こんなくだらないポルノともいえぬ映画に感心している観客に興味をもち、その映画が終了するまで、その客の風態とか年齢を想像していた。
場内に照明が戻ると、曾野から空席三つ向こうに座っていたのが佐倉だった。後はがらんとして、高下駄履いた板前とか、バーテン見習風の青年とか、ネクタイを締めない人種が、場内に散らばっていた。
曾野の視線は自然に佐倉に注がれ、佐倉も曾野と視線を合わせ、格子縞の真新しいハンチングを指先で押し上げるようにして、人なつっこい微笑で会釈を送ってきたのだった。曾野も釣られて、会釈を返した。
「セールスマンの方だっかいな……?」
佐倉は席を曾野の横に移して、いった。
「いや……」
曾野は、正直に弱電関係の会社に勤めているのだが、不況で自宅待機を余儀なくされているのだと答えた。
「家庭電化用品ちゅうやつでおますなあ。そいで、あんさん、独身でっか。英語でいうたら、バチェラーはんで……?」
滑稽な抑揚のある喋り口は、善人を証明しているようだった。
「そうです」
といえば、佐倉は座り方を半身斜に構える姿勢をとって、
「一流の大学出て、ええ会社に入りはったのに惜しいことでんなあ」
と、心底から同情する口吻でいったのだった。
「今の映画、三年半前には乳首がやっとこさ見えるとこで終わってたのに、えらい大幅に見せるようになったものですなあ。臍の下には肉色のなにやらを貼ってたようやけども……」
前貼りのことをいっているのだった。
「三年半、見んかったんですか」
「へえ、へへへ、娑婆とあんた、ちょっとご無沙汰の状態にありましてなあ……」
佐倉は好人物そのものの微笑をみせて、ハンチングをとり、

薄い短い毛を撫でた。

二

「婆婆とご無沙汰というと……？」

「わかってまんがな。刑務所へ行ってましてなあ。堺の金岡刑務所だすねん。ま、あの中は騒音公害もないしねえ、光化学スモッグ警報というのが一回あったかいなあ。御馳走は出まへんけども、贅沢はいえまへんわなあ。なんし、税金をおさめてる身やおまへんもんなあ……」

彼は喋り募りながら、頻りと刑務所をなつかしがっているようだった。

「なんで入ったんですか」

曾野も淡々としている佐倉に釣り込まれ、気易さを覚えたのだった。

「そら、社会的に悪い事をしたんですなあ。へえ、詐欺だす」

「他人を騙したんですな」

「ま、そういうことでっけどもねえ。騙される奴がいるさかいにね、これ、必然的に騙す奴が生まれてくるということだすわなあ」

騙す奴がいるから、騙される者が出てくるというのならわかるが、騙される者がいるから騙す者が誕生するのだというい方に聞こえた。いや、佐倉は心底から、そう信じているようであった。

「みんな、世間の人がでんな、しっかりしてはったら、詐欺ちゅう犯罪は起こらんもんでおまっせ」

というのだ。不思議な説得力がある。一理も二理もあるように思えてくるのだ。

「騙されるというのはでんな、善人やから騙されると思うのは違いまっせ。新聞では、そういうふうに書きますけどもなあ。騙される方も欲得やさかいにいかんのですわ。そら、世間には、善意で金を貸したのに返してもらわんという人も仰山いてはります。こういう場合、騙した奴はほんまに悪い奴だすがな。わては、こういうのを悪人と呼びまっせ。それも出世せん悪人でおますわなあ。チンピラ、鼻糞の類でおます、こんなんは……。わては、善人を騙しまへん。欲得づくの人間だけを今まで騙してきましたんや。これは知的な勝負ですわ。わかりまっか、わての詐欺の信念ちゅうのんが……」

詐欺の信念といういい方もおかしいが、それを大真面目に論じる佐倉という男がおかしかった。

「現代の社会、会社、企業、組織、機構、みんな個人を騙してますんやおまへんのか。一般大衆はでんな、みんな被害届を出してもよろしいのやで。二年前の一万円札が、現在は八千円札やおまへんか、こんなん、えらい詐欺やで……。ほんまに、糞おもろない……」

佐倉は頭から湯気あげんばかりに怒っているのだった。

再び洋画ポルノが上映された。

曾野は暗闇の中で、佐倉のいった言葉を反芻していた。欲得をもった人間だけを騙すのを生甲斐としている男がいると考えるだけで爽快な気分だった。たしかに、曾野は企業にうまい具合に騙されているような気がした。三年前、大学に貼

り出された求人広告で入社した。入社式が済んで、ただちに二週間の研修があった。大卒男子百人あまりが本社に集められて、業務内容の講義を受けたのだ。業務の基本各セクション別の講義は課長クラスの担当の下で行われ、次いで経理と営業は二手にわかれて、有馬温泉と白浜温泉に五日間の合宿講義が行われ、営業販売の曾野は白浜温泉組であった。前途洋々に仲間たちは酔っていた。そして、販売戦線に繰り出されて、小売業者の招待旅行、製品説明会と引きずりまわされたのだった。そして、自宅待機、減俸ときた。騙されているという印象が暗闇の中ではっきりしてきた。

スクリーンに映っている巨大な乳房の揺れが、ただ虚しかった。

「大きな乳房やなあ、外国人というのんは……。あんなん、ブラジャーして走っても、はみ出して、四段活用になるのやないやろかなあ……」

佐倉が呟くようにいった。四段活用という表現がおかしかった。この小柄な刑務所を出所したばかりの男の表現は、檻に囚えられていたにしては、実に自由奔放であった。

断固賃上げを要求して闘う労組を唯一の味方と考えるのも次第に虚しくなってきたのだった。会社側の言分が揺れる乳房の奥から聞こえてくるのだ。

「たしかに前期までは増収増益であったけれども、今期はご承知のとおり、売り上げ、利益ともに減であり……」

曾野昭太郎は、暗闇の中で砂を嚙む思いだった。

「ああ！」

スクリーンの金髪は悶える。その嗜々！ の嬉声も、彼には嘆きの嗚呼！ としか聞こえなかった。

三

「人間ちゅうもんは、欲に手足の生えた動物でおまっせ。これは、井原西鶴はんが、いみじくもいわはった言葉でおますけども、いい得て妙やと思いまへんか」

そうか、佐倉が考え出した言葉ではなくて、西鶴の言葉だったのかと曾野は安心しかけたものの、待てよ、この男のいうことを頭から信用するのは危険だと緊張を持続した。

「寛永通宝ちゅうのが日本での一番ポピュラーな貨幣でおますけども、寛永通宝ちゅうのは、何時出来たか知ってはりまっかいな？」

佐倉は、口許をへの字に曲げ、突き出すようにして曾野を窺った。

「寛永通宝というのは、そりゃ、寛永に出来たんだろうな」

「そら、ま、そういうことでっけども、そんなことやったら、今日日の高校入試はあきまへんで……。と、偉そうにいうもんの、こっちも、刑務所の図書係をやってる時に知ったわけでして……。寛永通宝という金らしい金が一般に出まわるようになったんは、寛永十三年でおますんやて……」

寛永十三年というのは西鶴が生まれる六年前であるという。だから、西鶴はものごころついてから死ぬまで、金、金、金に埋もれていたから、彼独特の皮肉な金銭哲学、金銭観察をしたというのだ。

佐倉の貨幣に対する知識は相当なものであった。
「たとえば、なんで、寛永通宝が生まれたというと、早い話が……」
徳川幕府の画策であるという。それまでに鋳造していた慶長金、慶長銀に銭を鋳造して加え、庶民の間に金銭の流通を盛んにし、商業都市大坂をつくりあげたという。
「なんでもかんでも金があったら人生は楽しいという思想をでんな、十七世紀の中頃につくりよりましたんやなあ」
西鶴が死んだ二年後の元禄八年になると、徳川幕府は急いで慶長金を改鋳して、悪質の元禄金貨を通用させたというのであった。銀貨もまた悪質のものにして、庶民の中に金持が現れるのを警戒したという。
「幕府も経済的に困ってましたんやなあ。そやから、えらい慌てよったわけやなあ。ま、しかし、いつの時代でも、そういうことでおますわ」
淡々とした語り口には、それだけ真実味が籠られていた。佐倉という男は伊達に刑務所に行って来たわけではない。西鶴から貨幣経済学まで、ちゃんと学んで来た様子であった。
「住めば都ということをいいまっけども、刑務所かて、住み方ひとつで都でおますのや。そら、ま、自由の束縛ちゅうことはありますけども、金儲けと色恋を絶たれた男はでんな、その期間だけでも一所懸命に勉強をしたらよろしいのや。人間、ものの考え方ひとつでっせ。大学を出てでんな、会社に勤めて、自分のやりたい勉強もせんと定年迎えて、それが人生とはいい難いもんや。それよりも、刑務所の中で勉強一途にして娑婆に出て来たらよろしいのや。但し、死刑囚とか無期懲役になったら、こら、いけまへん。刑の執行ちゅうのは確定した日から六カ月以内に法務大臣の命令によって行われますもんなあ。というても、生き伸びる方法は死刑囚でもおますのや。たとえば、上訴権回復の請求とかでんな、再審請求、非常上告ちゅうのもあるし、恩赦の出願とかいうのもあるわけですなあ……」
曾野は舌を巻いた。佐倉は刑務所の中で、西鶴の文学、経済、そして法学までもマスターしてきたのだ。そいつをぺらぺらと喋っていく。たしかに、色欲物欲を封じられた刑務所の中だからこそ、彼は真剣に、それらのことを仕入れることが出来たようであった。
「ところで……」
曾野は、凝っと、頓狂な佐倉の鼻柱の付根のあたりを見ながら、低い声で聞いたのだった。
「へ、なんだすか……」
「あんたは、なにで生活しているのですか」
「よう聞いてくれはったなあ……」
佐倉は、胸を張ってみせた。
「お天気師の亜流とでもいいますかいなあ……」
「オテンキシのアリュウ……?」
「というても、わかりまへんやろうなあ」
「わかりませんなあ」
「無理もない」
佐倉は、旨い料理を食ったように、舌先を上顎に音たてて

吸いつけて、曾野を見やったのだった。
「普通、お天気師というのはでんな、その……」
といって、口を噤んだ。
「どうかしたのですか」
「いや……」
佐倉は、二、三度、大きく首を振ってみせた。
「あんたにいうたかて、これは詮がないことですなあ……」
佐倉は呟くように、いった。そういわれると、余計に聞きたくなるというのが人情というものだ。曾野は、膝を乗り出した。
「よろしいか、あんさん……」
佐倉は、アンタとアンサンを巧みに使い分けた。
「これをいうてしもうたら、あんさんもお天気師の群れに体を投じることになるわけでっせ。それでもよろしいかいな?」
曾野は逡巡した。蟻地獄の入口に立った気持だった。
「色即是空という言葉がおますなあ……」
「はあ、経文の中にあります」
「われわれお天気師たちはでんな、色即是実の精神に生きるもんでおましてなあ……」
「シキソクゼジツ……」
「そうだす」
佐倉は、卓の上に、ストローに吸いあげた水で『色即是実』と書いた。
「これだすけども……」
「セックスが虚しいものだというのが色即是空ですな」
「さよう。色即是実というのは、色と欲で女を騙して金を巻き上げるわけだすな」
「結婚詐欺!」
「ま、そういうことだすけども、刑法の中には厳密にいうて、結婚詐欺という条文も項目もおまへん。そこを巧みに脱けていくのが、これ、お天気師だすな」
「巧みに……」
曾野は、完全に、佐倉に乗っていた。

チョイかけ入門

一

「俗に結婚詐欺ちゅうけれども、正確にいうたら、これは刑法と民法に分けられるのが原則でおますのや。これはおいおいと勉強してもらうとして……」
佐倉は、ぴんと立てた人差し指で鼻の横を撫でて、曾野を食い込む眼差で見た。
「結婚詐欺というのは、わてらの仲間うちではお天気師といいましたけども、これは最高の位でおまして、旧軍隊でいうたら、その、大将か中将クラスでおましてな、その下には佐官級、尉官級、下士官とつづいてますのやねえ。それらには、色々と名前が付いてましてなあ。貞操屋というのは尉官級かいなあ。童貞屋というのは下士官級といえるんやないかいなあ。その下が寝がえり屋。その下が寝小便屋……と、まあ、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com